

第四 漢 語

一 漢字漢文の和讀

(一)

漢字漢文の
學習

上古に、國語とは大いに性質のちがふ支那語を書きあらはした漢字漢文が、我が國に傳來した。わが日本人が之を學ぶのに、之を國語に譯する必要が有つた。その時には、近世の日本人が西洋語を學びはじめたと同様の苦心を、日本人の祖先は上古に經驗したことであらう。文教温故に、

「吾邦にて、漢字の音訓ともに、彼若^{わか}郎^{らう}子^こ王^{わう}の初めて經典を學びたまひし時より已にこれあること疑ふべからず。されば文學の行はれしころより、はやく訓讀することとおもはる。
(顛倒の讀み、吉備公に始まるといひ傳ふるは謬りなり然るに和讀のてにを忘れざらむが爲に、をこと點といふものを造り始めて文字の四隅上下に施すこととはなりにたり。)
と説いてある。漢字漢文の漢讀も和讀も、漢籍傳來のころから行はれたものと考へられる。さて中古までは、和讀が重んぜられて、できるかぎり漢語を訓讀したことは、かの詩經や文選などに音訓二重の譯讀が流行したことでも、うかがふことができる。たとへば詩經の和讀の苦心

開卷第一に「關々雉鳩、在河之洲。窈窕淑女、君子好逑。」とあるのを、「クワンクワンとやはらぎなけるシヨキウのみさごは、かはのすにあり。エウテウとたをやかなるシユクデヨのよきをとめは、クンシウまひとのカウキウよきたぐひなり。」とよむ類で、まるで「Dog」を「イットそれは、アドッグ一つの犬でイズある。」と譯讀するやうなものであつた。嵯峨天皇の御代に藤原伊時これぞきが木島の明神さまに願がけて、讀みを授かつたと言ひ傳へられてゐる遊仙窟の讀み様も、同様である。なほ當時の人が和讀に苦心した例として、菅家後集に「東行西行雲渺々、二月三月日遅々。」とある詩の句を、後の人が誰も讀みかねたので、北野の天神さまへ伺ひに參ると、夢のおつげに「トザマニユキ、カウザマニユキ、クモハルバル、キサラギヤヨヒ、ヒウラウラ。」と教へられたといふ話が、江談抄などに見えてゐる。

(二)

これは、漢文を讀むために和訓のできた次第であるが、また漢字を使つて國語を書きあらはすためにも和訓の必要があつた。古事記傳に、

「大御國にもと文はなかりしかば、上つ代の古事どもも何も直に人の口に言傳へ耳に聽傳はり來ぬるを、や後に外國より書籍と云ふ物渡參來て、其を此間の言もて讀みならひ、その義理をもわきまへとりてぞ、其の文字を用ひその書籍の語を借りて、此間の事をも書記

すことにはなりぬる。」

と説いてある。その書記しには大いに苦心したものである。陽春廬雜考に、わが國の言葉
を漢字にうつして文章としたもので今に残つてゐる最も古いのは、法隆寺の薬師佛の銘（推
古天皇十五年の作）であるとして、つぎのとほりに讀んである。

「池邊大宮治天下天皇、大御身勞賜時、歲次丙午年、召於大王天皇與太子而誓願賜、
我大御病太平欲坐故、將造寺薬師像作仕奉詔」（下略）

「いけのべのおほみやにあめのしたしろしめすすめらみこと、おほみみいたはりたまふと
き、としなみひのえのうまのとし、おほぎみすめらみこととひつぎのみことをめして、ちか
ひたまはく、わがおほみやまひたひらぎなむとおもほしますすがゆゑに、てらとやくしのみ
かたとをつくりつかへまつることをなきむとのりたまひき」（下略）

小中村博士は、これをば推讀であることわり、しかし必ずかやうに讀むやうに作つて
あることは疑ないと説いてゐる。この銘から百年ほど過ぎて元明天皇の御代にできた古事
記は、太安萬侶が稗田阿禮の誦習により漢字で古傳をうつしたものである。古事記は漢文
としては拙いけれども、古事記傳には「もはら古語を傳ふるを旨とせられたる書」として
左のやうに和讀してある。

「國稚如浮脂而、久羅下那洲多陀用幣琉之時、如葦芽因萌騰之物而成神名、宇麻志

阿斯訶備比古遲神、

「くにわかくうきあぶらのごとくにしてくらげなすただよへるときにあしかびのごとも
えあがるものによりてなりませるかみのみなはうましあしかびひこぢのかみ、」

萬葉集や祝詞や宣命なども、漢字の音と訓とを用ひて國語をうつしたものである。なほ
日本書紀や和名抄などの和訓の例を和訓類林の中から拔萃してみよう。

皇	祖	樂	人	奇	鳥	鬪	雞	驛	鈴
おほ	おや	うたまひ	びと	めづらしき	とり	ごりあはせ	せ	うまへの	すず
五	穀	三	神	朝	野	明	星	御	宇
いづくのたぢもの	かひこふか	みはらのかみ	かみ	あさ	ひな	あか	ほし	あめのしたるしめす	あめのしたるしめす
上	旬	尊	顔	浴	室	四十九日	更	蓬菜山	元
かひこふか	いづまてち	みか	ほ	ゆ	むろ	はてのひ	あかつき	さよのくに	き
千秋萬歲	出	如	今	社	稷	五	更	元	首
いづまてち	ゆ	い	いま	く	に	あかつき	あかつき	き	み
六	出	漢	左	牽	牛	雷	同	普天	率土
ゆ	いづはり	むらこし	かたはら	ひこほし	うし	かみなり	ご	あめのした	あめのした
食	言	億	兆	兆	兆	兆	兆	兆	兆
いづはり	ことば	おほむ	だから	だから	だから	だから	だから	だから	だから

かやうに入念に訓讀してはあがるが、しかし日本書紀などは、全體を訓讀させるつもりで
撰文したものでないことは、古事記傳にも北邊隨筆にも説いてある。

さても外國語を悉く適當に祖國語に翻譯してしまふことは、ほとんど不可能である。か
の唐の玄奘三藏の苦心きはまる譯經の結果たる五種不翻といふことが、翻譯名義集に説い

てある。即ち祕密不齟陀羅尼と多含不齟薄伽梵と此方無不齟閻浮樹と順古不齟阿耨耨と尊重不齟般若とである。わが國で漢語の不齟の出來たわけにも、また同じ様な所がある。

二 漢語の採用 (一)

漢語採用の
事情

わが國語における漢語の勢力は、大したものだ。普通用ひられてゐる辭書言海の類別表によると、總計三萬九千一百三言のうち、和語は二萬一千八百十七言、漢語は(言海の凡例に「漢語ハ普通和文ニ上ルモノヲ限リトセリ」とある)一萬三千五百四十六言、和漢熟語は二千七百二十四言である。即ち漢語は總計の三分の一以上を占め、和漢熟語は總計の十五分の一以上を占めてゐる。さうして言海の類別表では、唐音語即ち近古このかた傳來した支那語九十六言は外來語に入れられてゐるのに、漢語は特別の待遇をうけて外來語に入れられてない位に、最も親密に國語に同化してゐる。しかし嚴重にいへば、漢語も外來語とみるべきである。さて漢語が國語に採用された事情は種々ある。まづ漢語の性質から説かう。

語形の簡約

一、語形の簡約を便利とするのは、言語經濟の一つである。和語と漢語とをくらべると、多くの場合に漢語の方が簡約である。左に對比する和訓(およそ和訓類林による)は、

なほ練り縮めることはできようが、練り縮めた所で、漢語の簡約には及ぶまい。

五 穀コブ (神代記) イツクサノタナツモノ

三 神ジン (同) ミハシラノカミ

上ジヤウ 旬ジユン (神武帝紀) カムトヲカ

樂ガク 人ニン (允恭帝紀) ウタマヒビト

民部省ミンブシヤウ (和名抄) タミノツカサ

中納言チュウナゴン (同) ナカノモノマウスツカサ

正四位上ジヤウシシヤウ (同) オホイヨツノクラキノカミノシナ

すなはち「五穀」の例でいへば、漢語では三シラブルであるのに、和語では十シラブルとなる。特に組立の簡便にできてゐるのは、漢語の讀數法である。

一千五百座イツセンゴヒヤクザ (神代紀) チハシラアマリイホハシラ

一千四百六十疋イツセンヒヤクヨジッポキ (仁德帝紀) チムラアマリヨホムラアマリムソムラ

といふ和語のやうに、數を長たらしくいふのは甚だ不便である。土佐日記の「しはすのはつかあまりひとひのひ」(十二月二十一日)といふ風に、「明治二十二年二月十一日」の如き年月日を言はうとすると、随分長たらしいことになる。

なほ前の例にも見えるとほり、熟語をつくるに漢語は頗る簡約である。「將軍」をイクサノキミ、「黃疸」をキバムヤマヒと云へばのびてくる。

二、意味の包含 便利なことも、言語經濟の一つである。上古及び中古において、支那の文明を欽慕して、その思想を輸入した時に、これを言ひあらはすに適當な和語がなく、また俄作りもできなかつた場合に、その本家本元の漢語を同時に用ひたのは、自然の勢である。これは列擧するひまもないことであるが、少しくその例をあげてみよう。

社	シヤ	稷	シヨク	鈴	レイ	郡	クン	近衛府	チカベフ	兵衛府	ヒヤウフ	衛門府	エイモンフ	伯	ハク	卿	キヤウ	長官	チャウカン	大夫	ダイフ	帥	シュイ	將軍	シヤウケン
表	ヘウ	疏	ソ	（天武帝紀）	ウマヤノスズ	縣	ケン	（持統帝紀）	クニコホリ	和名抄	みな	ユゲヒノツカサ	和名抄	みな	カミ										

右の如く、和語よりは漢語の方が、その意味の包含に便利な場合がある。

三、音韻組織の多種多様 といふことも、言語經濟の一つである。音韻組織をくらべてみるに、和語よりは漢語の方が、はるかに多種多様である。外國の音はいやしいといふや

音韻組織の
多種多様

意味の包含

うな考を止めて、平氣で考へてみると、長音や拗音や撥音や促音や重母音などの錯綜してゐる所は、たしかに漢語の長所である。少しくその例を舉げてみよう。

皇 帝 みかど
クワウテイ

天 地 あめつち
テンチ

出 發 いでたち
シユツパツ

幸 福 さいはひ
カウフク

離 宮 かりみや
リキユウ

黄 金 こがね
ワウゴン

談 話 はなし
ダンワ

戰 争 たゝかひ
センサウ

精 神 こゝろ
セイシン

物 品 しなもの
ブツピン

水 車 みづぐるま
スイシャ

大 砲 おほづつ
ダイハウ

不 言 不 語 いはずかたらず
フゲンフゴ

無 關 係 かかりあひなし
ムクワンケイ

右の如き漢語は、國語に採用されてゐるばかりでなく、また和語の音韻組織にも影響して、「たつとぶ」(たふとぶ)「おもんばかる」(おもひはかる)「てうづ」(てみづ)などの音韻變化が助成されたのである。

四、言語の趣味 といふことも、漢語の傳播した一つの理由である。新撰字鏡に「菊」を辛與毛支」と讀んである。これは、唐土から渡つた蓬に似た草の意味であらうが、かう

いふ名では、漢語より長々しくなるばかりでなく、趣味をも失ふ感じがある。これに思ひ合はせるのは、英語で菊をクリサンセマム(Chrysanthemum)と呼ぶことである。これはギリシヤ語(Chrysos = gold, anthemon = flower)から出たラテン語を採用したのであるが、之を英譯してゴールデンズンフラワー(こがね花)などと呼ぶならば、いかにも趣味を失ふ感じがある。「麒麟」「鳳凰」「牡丹」「水仙」などといふ漢名も同様である。また支那人が長い歲月の間に數奇をこらした宮殿・樓閣・亭臺などの名稱は、高尚で文雅な趣味をおびてゐる。たとへば、

- 漢の長樂宮・通天宮・壽宮、唐の華清宮、宋の太平宮。
 - 漢の明光殿・飛雲殿、魏の太玉殿・芙蓉殿、唐の金鑾殿。
 - 漢の麒麟閣、唐の凌煙閣・勝玉閣。
 - 梁の五鳳樓、唐の紫雲樓・黃鶴樓・萬卷樓、宋の岳陽樓。
 - 晋の蘭亭、唐の秋興亭・沈香亭、宋の醉翁亭。
 - 漢の戲馬臺・栢梁臺・仙臺、唐の鳳凰臺。
 - 漢の上林園、魏の桐園、唐の金谷園・獨樂園。
 - 漢の白馬寺、北魏の永寧寺、唐の弘福寺・慈恩寺・清涼寺。
- などのやうに、どれも建築・風致・由緒などに應じて名づけられてある。その文明を輸入し、その趣味に感化されて、わが文物にも漢名を用ひたのは、無理のないことである。そ

漢學漢文の
盛大

れから漢語を採用した勢力を擧げてみよう。

五、漢學漢文の盛大　が、漢語をわが國語の中に取り入れた勢力となつた。それは、恰もギリシヤ語やラテン語の盛大がその語を西洋諸國語に取り入れさせたと同様である。漢學漢文の傳來このかた後世まで、漢學が大きな權威をもち、漢文は男子の學ぶべき文章となり、そこで漢語を用ひることが、先づ教育ある人々から行はれて、その勢力が廣く國民に及んだ。今も漢文は我が中等教育や高等教育に必須の學科となつてゐる。

佛教の傳播

六、佛教の傳播　につれて、漢語がわが國語の中に入りこんだことも、隨分多い。わが國へ渡つた佛教の經文は、支那で翻譯したものである。その經文を研究して之を國民に弘めた結果、佛教の思想が、漢語で以て多く普及した。室町時代前後に禪僧や商人らの傳へた支那語も多い。現代語にも、佛教の力で弘められた數多の漢語が廣く行はれてゐる。

法律制度の
施

七、法律制度の施行　においても、盛に漢語が用ひられたので、大いに漢語の普及をたすけた。先づ唐朝の法制を採り、その法制語を數多用ひたのである。明治維新以後さらに西洋の法制を採用するにも、盛に漢譯語を用ひてゐる。法令や官文書や公文書に、いかに多くの漢語が用ひられてゐるかは、目の前に明かな事である。

右に述べた様に種々の事情によつて、とても抜きがたい漢語の根柢が、深く國語の地盤

にできたのである。

三 漢語の採用 (二)

「皇國ノ興廢此ノ一戦ニ在リ各員一層奮勵努力セヨ」との東郷大將の號令の如く、我が國民は多くの漢語をつかふことがあるけれども、それがために決して國語の心髓を滅却しない。その心髓とは、言葉の順序や、その順序を整へて外來語を同化するのに祖國語の必要な事をいふ。つまり澤山の唐絲をつかつて、みな之を大和織にしてしまひ、日本語の日本語たる所は、どこまでも生き残つてゐるのである。

漢語同化と

國語法

先づ國語が漢語を同化してきた語法上のあらましから説いて見よう。

一、名詞や代名詞や數詞 として漢語は容易く國語に用ひられる。それで漢語の濫用もしやすいのである。數詞に漢語を採用したことは便利であるが、代名詞に繁雜な漢語を加へたことは面倒である。

二、動詞 として漢語を國語に用ひる方法に、およそ三種類ある。その一は、漢語を左行變格または他の活用へつゞけて、「愛する」「案じる」「譯す」「上京する」「正比例する」「七轉八倒する」などとすること。その二は、漢語を和語の接尾語へつゞけて「學者ぶる」

「残念がる」などとすること。その三は、「退治」「敵對」「問答」「料理」の如き漢語を和語の動詞の語尾が活用するやうに、「たいぢる」「てきたふ」「もんだふ」「れうる」などとすることである。

三、形容詞 として漢語を國語に用ひる方法に、およそ二種類ある。その一は、漢語を助動詞または接尾語につゞけて、「愉快なる記念日」「堂々たる對陣」「英雄らしい」「他人がましい」などとすること。その二は、漢語を和語の形容詞の語尾がかかるやうに、「鬱陶しい」「毒々しい」などとすることである。

四、副詞 として漢語を國語に用ひる方法に、およそ二種類ある。その一は、漢語をそのまま「去年みた。」「再三さがした。」「大抵できる。」などとかふこと。その二は、漢語を助詞または接尾語につけて、「別に考へる。」「徐々と歩む。」「歴々として明かである。」「來年ごろ行かう。」「十人づつ並ぶ。」などとかふことである。

(二)

さて外來語採用の相似た有様として、東洋のイギリスともいはれる我が國の言葉と、西洋の日本ともいふべきイギリスの言葉とを較べることは、甚だ面白い。

さかのぼつて歴史をたづねるに、昔はローマの大將ケーザルに征服され、今はブリテン

日英言葉くらべ

アングロ
クソン語

といふ島の名に古の名を留めてゐるブリトン人(ケルト種族)は、第五世紀の頃大陸から渡つてきたアングロ・サクソン人(ゲルマン種族)に、此の島の僻地へ追ひのけられた。そこでアングロ・サクソン語は、この島の新住民と共に榮えた。これより前から、ローマの國威とキリスト教の感化とで、左のやうなラテン語が、この島人の言葉に入りこんでゐた。

(ラテン語)

(古代英語)

(近代英語)

(漢語譯)

strata	tract	street	市街
vallum	wcull	wall	城壁
episcopus	bisop	bishop	僧正
sanctus	sanct	saint	聖人

ところで、アングロ・サクソン人も、第十一世紀に至つてノルマン人(これもゲルマン種族)にフランスから攻めこまれて、かのウイリヤム勝王に征服されてから後は、ノルマンフレンチが公用の言葉とされた。そこでアングロ・サクソン語は大變な目に出會つた。さて元をたづねると、ノルマン人もアングロ・サクソン人も、同じく武勇なゲルマン種族であつた。ノルマン人は、第十世紀にスカンジナビヤ半島からフランスの北部即ちノルマンジーへ渡つてきたのである。この新來のノルマン人は、武においてはフランスの北部を征服したが、文においてはフランス語の勢力に服従した。これは、支那を征服して帝國を

ノルマン
フレンチ語

日本人と漢
語漢文

建てた蒙古人や満洲人が、祖先の言語を棄て、支那語の勢力に服従したと同様である。しかしそのフランス語がノルマン人なまりであつたから、ノルマンフレンチといふのである。我等のつかふ漢語も、やはり日本人流に發音するのである。

アングロ・サクソン人は、ノルマン人の武力に壓倒され、ノルマンフレンチでなければ、裁判も教育も受けられぬといふ事情であつた。わが日本人が漢語や漢文を用ひたのは、支那の文明を欽慕しての事であつた。わが日本人が盛に支那の文明を採用した昔においては、漢文で文章をかくのが男子のほまれと思はれ、その第一流の人たちの一所懸命の作が、朝文粹などに集められ、宮づかへした婦人などの書きながした國文が、枕草子や源氏物語などとなつてゐる次第である。

しかしながら日英兩國語ともに、その本來の言葉の心髓を失ふことはなくて、外來の言葉を數多同化するに至つた。わが國では、平安朝の後半から、大和言葉の中に數多の漢語を混淆させた國語がさかえた。イギリスでは、ノルマン人の征服の後四世紀ほどの間に、アングロ・サクソン語の中にノルマンフレンチの數多の單語が混淆された英語がさかえた。さうして第十五世紀における文藝復興のかたラテン系の語が英語の中に澤山採用されたことは、江戸時代における漢學興隆と漢語との關係に似てゐる。

(三)

そも、印度ヨーロッパ語族のうちで、アングロ・サクソン語はゲルマン語派に屬し、さうして今は古典語となつてゐるラテン語や、その系統のローマン語四大方言の一つであるフランス語は、イタリア語派に屬する。それで、フランス語とアングロ・サクソン語とは遠親で、フランス語とラテン語とは近親である。大和言葉と支那語とは、語族を異にする。

日英言葉の
相似關係

わが國語で「きみ」(和語「おさま」)と申すのは、英語で King (アングロ・サクソン語系 queen (ア)といふのに似てゐる。「皇帝」(漢語「皇后」) (漢)と申すのは emperor (イタリア語派系 empress (イ)といふのに似てゐる。しかし國情がちがふから、たとへば「おなま」と queen とは、同じ意味にはならない。

Royal Palace (イ)と莊殿にいふのは「王宮」(漢)といふ様で、米國大統領の官邸を White House (イ)といふのは、和譯すれば「しろやかた」といふ様なものである。White House の名は、米國に似つかはしい。「白聖館」(ハクアウツワン)と漢語譯にはしたくない様な氣がする。

平安朝の御公家様が宇治に「別業」(漢)を営まれたとか、明治の元勳が大磯に「別莊」(漢)を構へられたとかいふが、イギリスでも Villa (イ)があると、仰々しくいふ。しかし country-

seat(イア)といへば、和語で「ひかへやしき」とでもいふ様である。church(ギリシヤ語からゲルマン語派に入つた語)といへば、日本で「てら」(辭林に「刹」の朝鮮音)といふ様で、村落にもその屋根が見えるのである。abbey(イ)といへば、すぐに Westminster などが思ひ出されて「西大寺」(サイダイジ)といふ様に、いかにも嚴めしいではないか。

わが國で「郵便局」(イウビシキョウ)や「驛長」(エキチヤウ)といふのは、和語でない。イギリスでも post-office (イ) station-master (イ)といふのは、アングロ・サクソン語でない。「牛肉」(ウニク)を beef(イ)といひ、「豚肉」(トニク)を pork(イ)といふのも、おもしろい。「うみ」(和)は sea(ア)で、「大海」(ダイカイ)は ocean(イ)といふやうな趣がある。

City(イ)といふのは、ロンドンやニューヨークのやうな大市街によばれ、town(ア)といふのは、小さい町によばれてゐる。わが國でも「東京市」「横濱市」「國府津の町」「小田原の町」といふ。即ち「市」は漢語で「町」は和語である。

とはいふものの、日本語と英語と、どの場合も同じ道づれをするものではない。現に「國府津町」「小田原町」といふときの「町」は漢語である。「隅田川」「利根川」の「川」といふのは和語である。River Thames, River Mississippi の River(イ)といふのは、アングロ・サクソン語でない。

こゝで一言ことわりたいたいことは、アングロ・サクソン語は、フランス語やラテン語などと、もと／＼同じ語族であるから、兄弟か従兄弟かと思案すべき場合のあることである。たとへば mother 即ち母といふ意味の英語は、アングロ・サクソン語では moder といひ、ラテン語では、すこし變つて mater といふ。triangle 即ち「三角」(漢)といふ意味の英語は、ラテン語から出て来たのであるが、その tri 即ち three といふ意味の言葉は、廣く印度・ヨーロッパ語族の諸國語を通じて、その語原を同じくしてゐる。これらの例は、わが日本語で母を「はは」(和)とも「フ」^父「ボ」(漢)ともいひ、三を「みつ」(和)とも「サン」(漢)ともいふ類とは、筋合ひがちがつてゐる。

さて「地租」「テーブルかけ」「蒸氣機關」を land-tax (アイ) table-cloth (イア) steam-engine (アイ)といふ類の熟語が英語にもあるが、日本語にも「重箱よみ」とか「湯桶よみ」といふ類の和漢熟語や漢洋熟語などがある。即ち、

重箱	本棚	金色	兩親	朱墨	天窓	役場	日曜日	七本槍	友禪染	日本晴
洋行土産	炭酸ガス	半ドン	臺ランプ	蟹カラ	湯桶	大判	小紋	貸本	西	
陣	狐拳	飯椀	御正月	玉突臺	山高帽子	賣捌人	見舞狀	雪景色	ガス燈	
ガラス障子	ペン軸	邦文タイプライター								

といふが如きである。なつかしい普通語となつてゐる和漢熟語や漢洋熟語などを、いやしい言葉のやうに見なしてはならぬ。

漢語に和語の動詞活用をつけて「征服したり」「征服せる」などといふが、英語でも、conquer (イ)などに ed (エ) や ing (エ) の接尾語をつけて conquered, conquering などといふ。また漢語に「に」「なる」などの助詞をつけて「丁寧に」「愉快なる」などといひ、英語でも外來語に接尾語をつけて politely (マイ) delightful (イ、ア) などといふ。

かやうにさまざまの外來語を用ひてゐるとは云へ、なつかしみの深い日用の普通語には、我が國語でも最も多く祖國語を用ひてゐる。即ち、「父」「母」「夫」「妻」「息子」「息女」「目」「耳」「見る」「聞く」「鼻」「口」「嗅ぐ」「食ふ」「笑ふ」「泣く」「嬉しい」「哀しい」「手」「足」「持つ」「立つ」「往く」「来る」「日」「月」「晝」「夜」「暑い」「寒い」「晴」「雨」「雪」「嵐」などといふのは、和語である。かの father, mother, husband, wife, son, daughter, eye, ear, see, hear, nose, mouth, smell, eat, smile, weep, glad, sad, hand, foot, have, stand, go, come, sun, moon, day, night, hot, cold, bright, rain, snow, storm などといふのも、アングロ・サクソン系の言葉である。

(四)

漢語の善用
と濫用

わが國語で、學術語は固より日用語にも、多くの漢語をつかふのは、ちやうど英語でイタリヤ語派系の外來語を使ふ様なもので、長い年月の間の鍊磨によつて發達したのであるから、我等は之を利用した方がよい。けれどもその漢語を濫用したり濫造してはならぬ。いはゆる生意氣なまじきとか生硬なまじとかいふ批評は、その濫用や濫造の場合に起るのである。雨夜の品定めに見える「ごく極ねち熟のさうやく草藥をふくして」といふやうな漢語の濫用は、ひとり式部承にさらはれるばかりではない。イギリスでも、演説や説教や談話に能くアングロ・サクソン語系の言葉を用ゐる方が、好い英語だといはれてゐる。わが國でも、誰にもわかる様に説いた心學道話などの例がある。

「この無理むりのない心を、わが方で本心ほんしんと申しますもつとも仁にを本心ほんしんとなへ、所によつては、すこしの差別さべつはあれども、そんな事の吟味ぎんみをすると、長うなるたゞ本心ほんしんは無理むりのないものとおぼしめしてまぢがひはござりませぬ。今日おのゝ様に、おひとり御目にかゝらなくても、おのゝ様さまがたのお心に、すこしも無理むりはないと知れます。その證據しやうこは言ふまじき事をいふか、すまじき事をする、忽ち腹はらのうちが何とやら心こゝろわるうおぼえる。これ無理むりのない心をもつて無理むりをするゆゑ、心がねぢれて、心こゝろわるいのでござります。『鳩翁道話きうおうだうわ』
『人有雞にんありけい。犬いぬ放はな知し求もと之を。』(中略)これは孟子孟子たとへを以てお示しなされたのでござります。雞けい犬いぬとは犬にはとり、すべて飼猫かひねこ或は雞けいなど、いつも家へ歸かへる時とき分に歸かへらぬと、その飼主かひぬしがうろろと尋たずねます。犬にとられはせなんだか、蛇へびにとられはせぬか、もしや人が盜ぬすんだか

と向ふ三軒兩隣り、まよひ子を尋ねる様に、『もし、こちらの三毛はこなたには居ませぬか、狸は参りませぬか。』と尋ねあるくは人情でござります。『鳩翁道話』

斯様に能く和語を用ひられるではないか。しかし我等は、わが國語における外資輸入について、徒らに反對するものではない。いな、むしろ國語の發達に必要とみとめる外資輸入をば是認する。即ち自主的見地において、國語の經濟をゆたかにするために、適當な外來語をつかふのが可いといふのである。

四 漢語の發音

(一)

わが日本人が用ひる漢語の聲音即ち字音は、著しく古今の變遷があり、また支那の字音とも甚だしくちがつてゐる。日本の字音には聲調(アクセント)が缺乏し、音聲が簡單になつてゐる。

わか國語に聲調を用ひることか無いではない。例へば、日と樋、橋と箸と端、などが、聲調で以て二種もしくは二種以上につかひわけられる。また我が字音において、「官廳」の「官」と「灌腸」の「灌」との如きは、少し聲調をちがへる例もないが、それは特殊の

日本の字音
と聲調

場合におこることであり、北京音(官話の發音)などで、「官」は上平、「灌」は去聲と、一々定まつてゐる例とはちがふ。左に北京音の四聲をあげて、その聲調がいかに複雑であるかを示さう。

- | | | | | | | |
|------|----|------|------|------|------|------|
| (上平) | 衣裳 | ○ 悲哀 | ○ 悠悠 | ○ 夫人 | ○ 音信 | ○ 酣睡 |
| (下平) | 蠻夷 | ○ 塵埃 | ○ 自由 | ○ 浮沈 | ○ 邪淫 | ○ 天寒 |
| (上聲) | 椅子 | ○ 豁然 | ○ 朋友 | ○ 府縣 | ○ 隱藏 | ○ 喊叫 |
| (去聲) | 異同 | ○ 親愛 | ○ 左右 | ○ 父親 | ○ 封印 | ○ 漢滿 |

右のやうな聲調の區別は、我が字音には無いのである。たゞ支那の古代の四聲(平・上・去・入)のうち、入聲は北京音にはほろびてゐるのに、我が字音には、熟語の場合に入聲の幾分が残り、そのほかは入聲が二短音か一長音かに變つてゐる。即ち、

- | | | | | | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 學校 | 質素 | 物品 | 月蝕 | 結句 | 百金 | 十錢 | 集註 | 合戰 | 雜誌 | 法度 | 甲子 | など |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
- (元の入聲音が *ㄨ* の音の前にきて結合するものの大概)

の如き結合の場合には、入聲の實をたもつてゐる。しかし悉くはさうでない。

學問 質實 物理 月夜 結合 百日 十人 集會 合計 雜巾 法律 甲乙 など
 は、入聲音が二短音か長音かに變るものである。さて日本人の作諛の心得に「フ・ツ・ク・チ・キに平字なし。」といふことがある。これは、入聲の字音假名遣から歸納したものである。

平水韻の入聲十七類の中で、

一屋 二沃 三覺 四質 五物 六月 七曷 八黠 九屑 十藥 十一陌 十二錫
十三職

の十三類は、字音假名遣のほとりにツ・ク・チ・キを明かに發音して二短音にするものである。けれども、

十四	緝	絳	絳	急	十	習	立	など
十五	合	閏	雜	塔	纈	榻	踏	など
十六	業	燁	協	夾	妾	涉	蝶	など
十七	洽	鴨	押	恰	甲	法	乏	など

は、現今では、通例は長音にかはり、たゞ熟語の場合と字音假名遣の上とに入聲のなごりを留めてゐるばかりである。してみると、古の支那音の四聲の中の平・上・去は、日本の字音では無差別となり、わづかに入聲の幾部分を残してゐるわけである。

(二)

つぎに漢語の音聲も、支那のそれに較べてみれば、頗る簡單になつてゐる。上古の日本語の聲音は、いはゆる單直で、その標準の熟語は七十ほどで有つたから、數百の熟音に四聲の別を立て、使ふ支那語を輸入しても、特別の教育をうけた人のほかは、これを日本化しなければ使ひかねたのである。そこで支那語の複雑な音聲を甚だしく日本化させた。

拗音が直音にかはるもの

第一 拗音が直音にかはるもの 漢語の傳來このかた、盛に拗音が採用されたけれども、その拗音が直音に變じた漢語も少くはない。例へば「花」は、現今の支那音でも、北京音・漢口音・四川音・揚州音・福州音では *hua* で、寧波音・温州音では *huo* であり、「漢吳音圖」によれば、漢音の原音はクワ、その次音はカ、吳音の原音はクエ、その次音はケであり、わが東京音では、その次音でカまたはケとよぶが如きである。なほ「漢吳音圖」から例をあげてみよう。

宗 江 回 卷 黄 下 國

漢音

原音 ○ スラウ ○ キヤウ ○ クワイ ○ クエヌ ○ クワウ ○ キヤ ○ クラク
次音 ○ ソ ウ ○ カ ウ ○ カ イ ○ ケ ヌ ○ カ ウ ○ カ ○ コク

吳音

吳音 ○ シユウ ○ キョウ ○ ウ エ ○ クワヌ ○ ウワウ ○ キエ ○ クラク
次音 ○ ス ワ ○ コ ウ ○ エ ○ カ ヌ ○ ワ ウ ○ ケ ○ カク

出氣音がな

第二 出氣音のないこと 出氣音は、わが國でもペランメイ言葉などには聽かれるけれども、標準音には之を用ひない。韻鏡には、出氣音を次清音とよんで非出氣音と區別し、今の支那語においても、出氣音が言語の區別に必要となつてゐる。例へば、

非出氣音

紫 臂 半 弓 格 足 (清音)

出氣音

此 譬 判 穹 客 促 (次清音)

の如きである。しかし日本語では、何れも非出氣音としてゐる。

重母音が長母音となるもの

第三 重母音が長母音となるもの 試みに「漢吳音圖」に示してある音を今の日本語音に較べると、

	褒	表	刀	高	奥
漢音	○ハ	ウ	○ヒヤウ	○タ	ウ
○カ	ウ	○ア	ウ	○オ	ウ
吳音	○ホ	ウ	○ヒエウ	○ト	ウ
○コ	ウ	○オ	ウ	○ウ	
今の日本語	○ホ	ー	○ヒョー	ー	○ト
○コ	ー	○コ	ー	○オ	ー
本語音					

の如く、別々の重母音が同じ長母音にかはつたのが甚だ多い。

鼻音の再變

第四 鼻音の *nas* (例へば「東」の *tons* 「青」の *ching* の *ns*) がウまたはイに變じ、

さらに第三の有様にも變ずるもの この類のものは甚だ澤山ある。平水韻の分類によれば左のとほり。

	(平聲) 上	(平)	(下)	(平)
(平聲) 一	東	二冬	三江	七陽
(上聲) 一	董	二腫	三講	廿二養
(去聲) 一	送	二宋	三絳	廿三漾
				廿四敬
				廿五徑
(下平) 一	蕭	三肴	四豪	十一尤
(上聲) 一	十七篠	十八巧	十九皓	廿五有

なほ平水韻の分類によつて重母音のものをあげると、左のとほり。

(去聲) 〓 十八嘯 十九效 二十號 廿六宥

鼻音の混同

第五 鼻音の *ni* と *ni* と(例へば「男」の *namu* と「信」の *shin* との鼻音)の別がなくなつて、單に *n* となるもの この別は、今の支那語にも、残る地方と残らぬ地方とあるが、支那や日本の古の標準字音には、たしかに有つた。例へば、

(舌韻六部) (漢吳音圖説)

東冬江陽庚青蒸 〓 鼻音 (*ni*) 〓 喉内 〓 *u*

眞文元寒刪先 〓 舌抵顎音 (*ni*) 〓 舌内 〓 *u*

侵 覃 鹽 咸 〓 閉唇音 (*ni*) 〓 唇内 〓 *u*

(注意) かのローマ字綴りで *ny* の前の *n* を *ni* と綴るのは、これとは全く理由がちがふ。それで、そのローマ字綴りでは「先般」を *senpan*、「先生」を *sensei*、「鹽梅」を *anbai*、「鹽田」を *enden*、「文明」を *bunmei*、「文章」を *bunshō* と綴るのである。

唇内の入聲が長母音となる

第六 唇内の入聲が、入聲の特質を失つて重母音に變じ、さらに長母音となるもの。これは、前にあげた入聲の十四輯乃至十七洽におこる日本字音の變化である。それで「十遍」(*jippen*)「十二」(*jūni*)「雜費」(*zappi*)「雜用」(*zōyō*)「法度」(*hatchō*)「法理」(*hōri*)などの例がでされてゐる。

すべて日本の字音は、支那の字音にくらべると、その音韻組織が、後世ほど簡單になつ

てゐる。試みに「字音假字用格」から「カウ、コウ、クワウ、カフ、コフ」の部の漢字の若干をとりだして、これに今の北京音を記してみよう。(北京音の記載は Giles 氏の シヤイリス "A Chinese-漢 English Dictionary" (1949))

(カウの部)	高 kau	考 k'au	好 hau	孝 hsiau	交 chiau	巧 ch'iao	剛 kang
康 kang	航 hang	香 hsiang	江 Chiang	更 keng	坑 k'eng	衡 heng	など
(コウの部)	構 kou	口 k'ou	侯 hou	公 kung	孔 k'ung	紅 hung	など
(クワウの部)	光 kwang	曠 kwang	荒 hwang	航 kweng	など		
(カフの部)	閤 ho	蛤 ko	恰 ch'ia	恰 ch'ia	など		
(コフの部)	劫 chie	な a					

随分複雑に見える字音假字用格でさへ、かやうな比較になる。まして今の日本字音では、明治三十三年改正の小學校令施行規則の第二號表に見えるやうに、その發音が凡そ「コ」の一種であるのに較べると、驚くべく簡單になつてゐる。

つまり、複雑な音韻の支那語が簡單な音韻の國語に同化されたので、右の如き種々の變化が出來たのである。支那語にも古來音韻の變化が出來てはゐるが、古來我が國に傳來した支那語の原語は、「字音假字用格」に見えるものよりは更に複雑であつたのである。

(三)

第三、いろいろの音便 二音または二音以上を連ねて呼ぶときに、左の如き種々の音便ができる。

連濁

「信心」をシンジン 「銅版」をドウバン

連聲

「観音」をクワンノン 「三惡道」をサンナクダウ

略音

「文字」をモジ 「格子」をカウシ

増音

「詩歌」をシイカ 「夫婦」をフウフ

第四、唐音即ち宋朝以後の音の傳はつたもの 例へば、「行燈」^{アンドン}「提灯」^{チャウチン}「天秤」^{テンピン}「土瓶」^{ドピン}「杏子」^{リンズ}「綾子」^{リンズ}「下火」^{アコ}「普請」^{フシン}「行脚」^{アシギヤ}「看經」^{カンキン}「明」^{ミン}「清」^{シン}「北京」^{ペキン}「上海」^{シャンハイ}「牛莊」^{ニウヂヤン}などの類である。唐音語は、漢音語や吳音語に對して字音を多様にし、例へば、同じ「明」の字を「明白・明朝・明朝」などといひわけ、「行」の字を「同行・同行・行宮」など、また「經」の字を「經文」^{ケイブン}「經文」^{キヤウモン}「看經」^{カン}などといひわけてゐる。

なほ我が字音にも、支那語における異義異讀のものゝ幾分かを傳へてゐる。たとへば、善惡(よしあし)と憎惡(にくむ)、容易(たやすい)と變易(かはる)、覆掩(おほふ)と顛覆(くつがへる)の類である。

右に述べたやうに、わが漢語の發音は、聲調において缺乏し、音聲の種類において簡單

となり、たゞ吳音や漢音や音便や唐音などにおいて聊か多様となつてゐる。この多様な事は、漢字を學ぶ上には面倒であるけれども、簡単な日本の字音を稍複雑にして、語音の差別を増した事になつてゐる。なほ後に「日本の字音」の條にこれを詳説しよう。

五 國民教育と漢語

(一)

かへりみれば漢語が大流行に向ひつゝあつた明治の初年から、先輩が祖國語を尊重することに力をつくしたことは、誠に感謝すべきである。明治七年に清水卯三郎氏が發行した翻譯書「ものわりのはしごまたなせいみのてびき」の如きは、あまりに和語に執着した嫌ひがあるにもせよ、とにかく祖國語を尊重した精神は敬ふべきである。この書物の名は甚だあやしい、漢語でなら「化學楷梯」などといふべきであるとの批評がある。しかし漢語の方はどうかといふに、化學といふも、やはりあやしい譯語で、且つ「科學」「歌學」、などと字音が混同する不便があるではないか。和語には苦情をならべて、漢語なれば何でも通すやうな習慣を改めて行きたい。

さればと云つて、我等は「學校」を「まなびや」と改めようなどと云ふのではない。立派に

音聲本位

我が國語に同化してゐるか、またはよく同化のできる漢語は、今後とも利用して行きたいと思ふ。ついでには、とりわけ普通語においては、文字本位をやめて音聲本位をとりたい。漢語の弊害は、何でも漢字を結びつけて目じるしが出来れば濟ましておく所にある。言語の本體である音聲をなほざりにした漢語は、よく日用普通の役には立たない。

文字本位

例の「化學」と「科學」と「歌學」あるひは「家學」などの同音異義の漢語ができて、枕詞でもつけるが如くに「ケミストリーの化學」「サイエンスの科學」「うたの歌學」「いへの家學」などといふ不便が起つたのは、全く文字本位の弊害である。文字本位からいへば、「高・稿・考・好・剛・航・香・更・衡・交・孝・江・講・公・侯・工・紅・甲・劫」など、目に訴へる字體が別々にちがふから、眼に見る場合には、音聲の衝突は少しもかまはないけれども、之を我が國語で耳に訴へる場合には、よし前後の關係で幾分かの差別が想像されるにもせよ、頗る曖昧であるのを免れない。又わが國語よりは遙かに音韻組織の複雑な支那語でさへも、熟語が盛に行はれてゐる。してみれば、わが國語では、なほさら適當な熟語によつて區別をつけるのを本則とし、音聲本位を以て漢語を利用して行きたい。

(二)

漢文直譯と
漢語同化

漢語を用ひるのに心得べきことは、漢文の直譯と漢語の同化との區別である。試みに古

今集の漢文の序を直譯して、これを國文の序とくらべ、南谿の西遊記と良齋の西遊記漢譯の直譯とをくらべてみても、この區別は明かである。左に「扇的」を柴野栗山が漢譯した一節と、その漢文の直譯とを引合せてみよう。

「船の中より、年の齡よはひ十八九ばかりなる女房の、柳の五衣いつくせぬに紅の袴きたるが、皆紅の扇の日出ひいでしたるを船のせがいに挟みたて、陸へ向ひてぞ招しつゝきける。」（平家物語）

「舟中出宮娃、年可十八九、綠衣紅袴、開純紅扇書旭曦者、挿竿樹之船頭、向岸而招。」（栗山漢譯）

「舟中宮娃を出す、年十八九ばかり、綠衣紅袴、純紅の扇に旭曦を畫ける者を開き、竿に挿みて之を船頭に樹て、岸に向つて招く。」（漢文直譯）

我等は國民教育に用ひる文章には、成るべく漢文直譯體を避けて、立派な國文をねりあげねばならぬ。曾て、ある地理教授用書において、

「本邦の地勢を按ずるに内地は一面に山峯重疊して無數の源泉はこの間に發し滾々として流れて大小の河川となり、沃野を横ぎりて田畠澆漑の用に供し、舟楫往來の便を通じて、幾多の魚介をすましまして、生民の食料を供ふる淵源となれり。」（漢語の印は引用者がつけた）

といふ文章をみた時に、その中の漢語を淘汰して、

わが國の地勢をみるに内地は一面に山々相重りて、無數の源はこの間より出で、たえず流

れて小川となり、大川となり、肥えたる野を横ぎりて田畑に灌ぎ、舟を通はし、また多くの魚と貝とをすましめて、住民の食料を供ふる本源となれり。

などとしたく思つた。世には、漢文くづれの系統を引いた庭訓往來流に、近世の支那時文風の熟語を取入れた日用文が、まだいくらか行はれてゐる。例へば、

拜啓春暖相催候處 高堂益々御清榮御起居被遊候哉御伺申上候降而弊宅一同無異罷在候
間乍憚御休念被下度候(中略)書外不日拜芝之上申速度候勿々不盡

の如きである。かやうな文章を改良して行くことにせねば、あはれ、尋常小學はおろか、高等小學を卒業した者でも、日用文の讀み書きが能く出来ないといふ情ない境遇に苦ませておかねばならぬ。「暖かになりかけ」は「春暖相催」より、「御きげんよく御くらし」は「御清榮御起居」より、「あら〜」は「勿々不盡」より好い言ひ方で有るといふことを、第二の國民に吹きこんでおきたい。

(三)

言文一致體は、むづかしい漢語を淘汰するのにきつめが有る。なせかといふに、言文一致體は現代の活きた言葉を基とするものであるからである。ある人の比較した文句に、左の如き例がある。

談話ヲ聴取シテ歸來ス。リハナシヲキ、トツテカヘル。

道路ニ遺失セル物品。||ミチニオトシタシナモノ。

論伏セラレタリ。||イヒコメラレタ。

日子ヲ空過ス。||ウカウカヒシオクル。

不問ニ付スルヲ得ズ。||キ、ナガスコトハデキヌ。

なほ明治の末つかた、實業之日本社主催の全國小學校成績品展覽會における綴り方を見た時も、言文一致體が漢語の淘汰にきゝめがあることを深く感じた。左にその例を擧げしてみよう。(漢語の印は引用者がつけた)

○僕の弟

私には弟が二人あります、一人は六つで、一人は三つです、大きい方は大[。]。そ[。]う。いたづらつこで、よくしかられますが、時には、又おもしろいことをいつて、みんなを大笑ひさせます、小さい方は、かはひらしくて、ちよこゝ、あるく時の足つきが、おもしろうございます、みんなが學校からかへるのをまつて居て、かへつて來ると、[。]所[。]になつて、ふざけます、私の小さい時もあるなであつたか、と思ふと、おかしくてたまりません『東京市立の尋常小學校第三學年兒童』

また國文を讀むのに心得べきことがある。即ち、その漢語が、和語にも漢語にも讀まれる場合に、漢語でよまないで可い所を漢語によみ、和語でよむべき所を漢語によむが如きは、戒むべきことである。例へば、

國民教育上の希望

○眞まことに ○新あらたに ○時とき々 ○事こと々 ○度たび々 ○わが郷きょう
 ○山路やまぢ ○惹ひき起おこす ○足あし下したに見みる ○清水しみず ○幾年いくねん ○深山みやま ○山やま翠すゐに ○別わかれを告つげ
 ○濶ひろ手て ○水み底ぞこ ○篝火かがりび ○青あお田た ○種たね子こ ○月つき影かげ ○大おほ空ぞらの月つき ○等なぞ閑ざん ○一ひと棟たねの
 家 ○浮うき世よ ○日ひ暮くれとなる ○花はな園ぞの ○谿たに間ま ○黒くろ雲くも ○今こゝ宵よひ ○枕まくら邊べ ○海うみにも
 にも ○魂たましひ消きえ膽い冷れいか ○不ふ如じょ歸きの一ひと聲こゑ
 の類一々かきあげる違がない。我等は國文の漢字を讀むにあたり、常識にはづれぬ限りは、これを和讀するやうにしたい。

右は、わけても國民教育における漢語について希望する所の大要である。さても我が國民は、亂雜に漢語を使つて、つらい目をしてゐる。しかし我が國語の自主獨立によつて、このつらい境遇は必ず解脱せねばならぬ。今のまゝで放任しておけば、あはれ、第二の國民もまた亂雜に漢語をつかふ境遇を解脱することは出來まい。わが國民教育の任にある人々が、一定の見識を以て、第二の國民に亂雜な漢語の使ひ方をさせない様に仕向けられることを深く望む次第である。